
I S—転生者の軌跡—

雪丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS―転生者の軌跡―

【Nコード】

N3764BA

【作者名】

雪丸

【あらすじ】

神様の部下のミスで短い人生を終えてしまった少年「神楽 湊」
彼は、神様の提案でISの世界に行くことに……。織斑一夏やその仲間たちと一緒に楽しく生活していく……。しかしその平穏ながらも楽しい日々を脅かす黒い影が少しずつ彼らに迫っていく。湊たちはその黒い影に立ち向かうことを要されるようになっていく……。湊たちの運命は？そして黒い影の正体とは？

第1話プロローグは突然に

「ここは……」

気がつくと俺は見知らない空間にいた。周りを見渡すが辺り一面真っ白で何も無い……。ここはどこなんだろう……

「ここは死者が行き着く最後の場所じゃ」

「誰だ貴方は？……それに死者って俺は死んだのか？」

「儂はオヌシ等の言う髪と呼ばれる存在じゃ。それとオヌシの思っているとおりオヌシは死んでおる。」

やっぱり死んでいるのかよ。……ああ結構やり残したことばかりなのに。こんな時に後悔ばかりなんて何か嫌だなあ

「……」

「実はな君に少し用があつての」

「？用？何の」

「スマンかったッ!!」

神様は、いきなり土下座をしてきた。ッてはあああああ!?

「えッ!?! ちょっと頭上げてくださいッ」

「そうもいかなのじゃッ！！僕の部下の天使がミスさえしなければオヌシは死ぬことはなかったんじゃ」

「だとしても貴方が謝ることじゃないでしょう！？」

「部下の責任は上司の責任じゃ」

この神様部下の責任も自分の責任とかんじているんだな。・・・ここまでされると許すしかないじゃないか神様の部下のことも。

「・・・いいですよもう住んだことですし」

「スマン。・・・このお詫びとしてオヌシを転生させようと思っているのじゃが・・・どうじゃ？」

「本当ですかッ！？」

「うむ。それとオヌシの願いを3つまで叶えてやろう」

おおッ！！気前がいいぞこの神様。・・・正直ここまでされるとこちがなんか罪悪感感じるんだけど・・・まあいいか。

「んじゃその前に行く世界のこと教えてくれない？」

「勿論じゃ。オヌシが行ける世界は、ISの世界、リリカルなのはの世界それと緋弾のアリアの世界じゃ。どれがいいかの？」

「んーじゃ、ISの世界で」

「結構即答じゃのう。いいのかの？」

「ん。言われた世界の中で一番好きなのがISの世界だから。」

まあ、本当はほかの世界に比べて死ぬ確率が一応低そうかなって思ったからだけど。一番好きってのは本心だけどね。

「分かったのじゃ。では願いは？」

「まずは、あいえずに乗れること。」

「まあそれがないとつまらんからのう。」

「それと身体能力が千冬さんより少し下」

「最強じゃなくていいののか？」

「ん。あんまり強すぎると目を付けられやすいから。」

政府に狙われるなんてとんでもないし、めんどくさいことありやしないからな。

「それでも十分目を付けられそうじゃがの」

「いいっての。それと、最後はおれのIS専用機を用意してくれ」

「ふむ。以上かの？」

「おう。よろしく頼むよ」

「じゃ、始めるかの。 ■ ■ ■ ■ ■」

神様が、俺の効いたことのない言葉を唱える。すると俺の体が光に包まれ、この空間一杯に広がると光は俺の中に消えてくように無くなった。そして、首元にISの待機状態のペンダントが下がっていた。

「・・・これで終わり？」

「うむ。後は、ISの世界に行くだけじゃが・・・気をつけれ？オヌシを送ると同時におそらくイレギュラーが一緒に入り込むはずじゃ。オヌシにはそれを駆除してもらうことにもなる」

「了解さ。転生させてもらうんだ。そんなくらいの事くらい遣らせてもらうよ」

「そうかの。では送らせてもらおうかの」

「ん。色々ありがとう神様」

「・・・オヌシ幸あらんことを ■ ■ ■ ■ ■」

神様は俺に能力をくれた時とは違う、言葉で俺をあいえすの世界へと送り出してくれた。・・・コレから色々と大変かもな・・・でも第二の人生だおもいつきりたのしむさッ

第2話クラスメイトは全員女子！？（前書き）

漸く主人公の名前が出ます。
それと殆ど原作通りです。

第2話 クラスメイトは全員女子!?

「全員揃っていますねーそれじゃあSHR始めますよー」

転生して早二ヶ月。・・・とうとう俺もこの学園の生徒になっています。・・・はあこの二ヶ月いろいろあったな。・・・まあそれは置いて、さっきの号令の声は、

この一年一組の副担任「山田真耶」先生だ。上から読んでも下から読んでもやまだまや。・・・うん。とても覚えやすい。

「じゃっじゃあ自己紹介をお願いします」

そう言うがクラスメイトたちはシーンとしている。・・・中々薄情だなキミ達。まあ俺もだけど。にしても気まずいなあ。・・・クラスの女子に何か舐め回されるように見られているような気がする。

「・・・くん・・・織斑一夏君ッ」

「はっはい!？」

「あっあのっいきなり大きな声出しておっ怒ってるかな?ゴメンねでも自己紹介「あ」から始まって今「お」だから織斑来んなんだよね。だからね、ご、ごめんね?自己紹介してくれるかな?だ、ダメかな?」

・・・山田先生アンタ誤りすぎだろう。教師だからもつと堂々としていいと思うけど・・・それにしても一夏何か変なこと考えてんじゃないのか?

「い、いやそんなに謝られても・・・ってか自己紹介しますから先生落ち着いてください。」

「ほ、本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ？」

「本当ですよ。・・・ええーと織斑一夏です。よろしくお願いします。」

戸惑い気味に言う一夏。・・・しかし、クラスの子はもうちよつとしゃべってよと言わんばかりに見ている。・・・あれはきついだろうな・・・あつ一夏が唯一知り合いの篠ノ乃箒にアイコンタクトを送る。・・・しかし失敗
意を決したのか一夏は

「・・・以上ですっ」

「プツ・・・アハハハッ」

ガタタッ

何人かの女子が椅子からコケる。・・・しかし原作読んでてもこのシーンは面白いなあ。だから飽きないんだよひと夏には。『パアン』

「いってえー・・・げえ関羽ッ!？」

『パアン』

「誰が三国志の英雄か馬鹿者」

おおう、すごい威力だ。あんなので叩かれたら凄まじい勢いで脳が衰えるんじゃないか？

「あ、織斑先生。会議の方はもう終わられたんですか？」

「ああ。山田君クラスへの挨拶を押し付けてしまつてすまなかつたな」

一夏の時との対応が違うのは・・・日頃の行いだらう

「おい。お前も自己紹介しろ」

「へーい。」

『パァン』

「・・・神楽湊です。そこにいる織斑一夏と同じで男子でISを使える奴です。・・・まあ趣味は読書と料理。特技は機械いじりです。よろしく願います。」

ああー痛かつた。本当シヤレに並ん痛さだ。・・・まあ自己紹介はあんなもんでいいだろ。現に織斑先生から出席簿アタックが飛んでこないし。

「・・・お前もあのくらいできるようになれ」

「分かつたよ千冬ねえ『パァン』いてえ！？」

「織斑先生だ馬鹿者」

「こほん。．．．諸君私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言葉をよく聞き、よく理解しろ。できないことは出来るまで指導してやる。私の仕事は、弱冠15歳を16歳に鍛え上げることだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな？」

それって結局逆らえないんじゃない？．．．なんつー絶対王政？

「『『『『きやああああああああ』』』」

ぬおうつ！？コレは．．．実際に聞くと耳に来る．．．この女子は超音波でも放っているのか？

「きゃー！ー本物の千冬様よ！？ずっとファンでした。」

「私、お姉さまに憧れて北九州からやって来たんですッ！！」

「ああ．．．なんて凛々しいお顔。．．．しばらくオカズに困らないわ」

すごい人気だなあ．．．まあ最後の人の発言は気にしないことにする．．．なんのオカズにするのかは．．．まあわかるだろう。

俺も物凄い歓声に正気味になっていると織斑先生が額に手を当てながら

「よくまあ毎年これだけのバカ者共が集まるものだ。．．．それとも何か？私のクラスだけに集中させられているのか？」

「きゃあああお姉さま。もっと叱って、もっと罵ってッ！」

「でも時には優しくして」

「そして、つけあがらないよう躡してえ」

・・・ダメだこいつら早く何とかしないと。・・・あつ織斑先生本気で呆れている。まあしょうがないかこんなのばかりだし。

「・・・はあ。ほらSHRはもう終了だ。コレからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが基本動作を身に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろよくなくとも返事をしろ。私の言葉には返事をしろいいな？」

おお本当に凄い鬼教官っぷりだ。・・・まあ織斑先生も出ていったし、授業が始まる前に一夏に接触しておくか。・・・からかいがてらに・・・な

第3話貴族との会合？（前書き）

意外とまだヒロイン登場まで遠い（・・・・・）

第3話貴族との会合？

「なあ神楽湊、でいいよな？」

こっちから声をかけようとしていたらあっちの方から声を掛けてきた。まあ好都合だけどね。

「おう。そう言うキミは織斑でいいんだよな？」

「一夏でいいよ。男子なんて俺とお前だけだし仲良くしようぜ」

「じゃ、俺も湊でいいよ。よろしくな一夏。」

俺と一夏は、握手を交わした。・・・意外と親しみやすいな一夏のやつ、だからモテるのか？・・・うーむコレは是非ともコツを聞きたいがコイツは無自覚だろうな。

「ちよつといいか？」

「ん？ 筈？」

「神楽・・・だったか？コイツを少し借りてもいいだろうか？」

「おお。構わんよ篠ノ乃さん」

「そうか。スマンナ。」

「わりい湊。また後で話そうな？」

「はいはい。いいから行ってこい」

そう言つて俺は箒と一夏が教室から出ていくのを見送る。・・・さて、この好機の視線をどうしようかな・・・まあ後で一夏に憂さ晴らしするとうかが

「ねね、みつくん。」

「？みつくん？」

「うん。湊くんだからみつくん。」

「まあいいや。・・・でどうしたの・・・えつと」

「あつ、ごめんねー私は布仏本音。のほほんでいいよー。」

本音ことのほほんさんが話しかけてきた。原作通りダボダボした制服だな。まあ不思議と似合っているけど

「んでのほほんさんはどのような要件かな？」

「んー取り敢えず挨拶しておこうと思つてー」

「あり？そつなの？」

意外だ。意外に礼儀正しい。・・・コレは原作でののほほんさんに対する評価を見直す必要があるかもしれない

「うんそだよー。あ、もうすぐ時間だから戻るねー」

「じゃあまた後で？」

そう言った直後授業開始を知らせるチャイムが鳴った。言わずもがな一夏たちは織斑先生の制裁を受けることが確定した。

「——であるからしてISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したISを運用した場合は、刑法によって罰せられ——」

ふうむ。勉強になるなコレは。・・・えっ？神様から知識は貰わなかったのかって？・・・だってそれじゃあ授業が退屈だろう？それに知識を自分で育むのも悪くないし。

「というわけです。・・・織斑君？」

「えっ！？・・・はい」

「何か今までで分からないところがありますか？」

「えつとあの・・・」

「何ですか？遠慮せずに行ってくださいね！！私は先生ですから！」

・・・うん。山田先生。そのやる気は尊敬しますが・・・

「はい先生っ」

「何ですか織斑君」

「殆どわかりません」

「え・・・殆どですか？」

ほら、流石に山田先生も表情が引きつっている。全く一夏って奴は・・・まあ面白いからいいけど。

「他にここまでわからない人はいますか？」

しーーーーーーん

「・・・織斑。入学前に渡した参考書は読んだか？」

「参考書？・・・ああ。古い電話帳と間違えて捨てました。」

『パン』

「必読と書いてあったらろう馬鹿者」

「うぐっつ」

「はぁ・・・神楽。お前は理解しているのか？」

織斑先生が急に俺に降ってきた。・・・まあ理解はしているけど。意外と簡単だし。

「はい。一応理解しています。」

「そうか。なら織斑に教えてやれ。」

「了解しました」

まあ教えるのは嫌いじゃないからいいけど。・・・一夏がこちらをキラキラした目で見ていたが、俺は基本的なことを教えるだけで、そのほかは知らないからな？

「サンキュー湊。助かるよ」

「まあ、気にすんなや。」

「・・・こほん。織斑は放課後に再発行してやるから一週間で覚える」

「え、いや一週間あの量は・・・」

「やれと言っている」

「・・・はい。」

ドンマイ。一夏つ、・・・と此処で授業終了を知らせるチャイムが鳴って、一時間目がようやく終わった。一夏は、授業が終わって机に突っ伏した。

「お疲れさん。一夏」

「おお。湊か」

「ああ。どうだ？少しは理解したか？」

「・・・いや全く。」

再び、一夏は机に突っ伏した。・・・ここ原作を見たけれど、そうとう答えてるみたいだな。わからなくもないけど。

「つーか何で湊は理解しているんだよ」

「一夏と違って参考書捨てないで勉強したからな」

「うグッそこを突かれると痛いぞ」

「自業自得だ」

そう言っただけで一夏は面白くなさそうに顔を背けた。・・・拗ねたな。ってか原作でこんな拗ねやすかったか？しょうがない

「コレから勉強すればいいだろ？俺も教えるし基本的なことだけ」

「それもそうだな・・・って基本的なことだけかよッ！？教えんの」

「応用は、自分でやったほうが身につくからな」

「そうなのか？」

「そうなのです」

そう返すと一夏は、なにやら妙に納得したような顔で頷いていた。
・
・
・
なんか馬鹿にされた気がする。よしここは

「まあ一夏なら何年かか『ちよつとよろしくて?』ああんっ!?」

「おおーい何かヤンキーみたいになつたぞ湊」

「訊いてます?お返事は?」

「ん?聴いてるよ・・・で何?」

「そちらの方は訊いてますの?」

「は?聞いてねえけど何か?」

・・・原作通りこの時のセシリアうぜー何その自分の話聞いてて当然みたいな言い方。本当にいらいらするな。

「まあなんですそのお返事。わたくしに話し掛けられるだけでも
光栄なのでそれからそれ相応の態度というものがあるのではないのか
しら?」

「へーそれは光栄だな」

「悪いな。俺君が誰だか知らないし。」

「私を知らない?このセシリア・オルコットを?イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを?」

「え？セシリア・オセロツト？」

「わたくしをあのような者と一緒にしないでくださいッ！！」

おおつ通じた・・・のか？ってか些か馬鹿にしすぎじゃないのかね？彼は意外とすごいんだぞ？

「あーそりゃ悪かったな。オセロツト」

「だからッオルコツトですわッ！」

「あー質問いいか？」

「・・・ふん。下々の要求に応えるのも貴族の勤めですね。よろしくてよ」

「代表候補ってなんだ？」

ガタタッ

聞こえていたクラスメイトとセシリアがずっとこける。・・・一夏。シリアスから一気にギャグに変えやがった。恐るべきその性格。

「あ、貴方本気でおっしゃってますのッ！？」

「おう。湊なんなんだ？代表候補生って」

「まあ言葉通り、国の代表見習ってことだな。」

「ああなる程。確かに言葉通りだな。」

「そうエリートなのですわッ!!」

セシリアがそう言っさらしきかんざして腰に手を当てて自慢していた。・・・でもさ、代表候補性なら四組みにもいるよな。更織簪が。

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡・・・幸運なのよ？その現実をもう少し理解していただける？」

「「そうかそれはラッキーだ」」

「貴方たちねえバカにしていますの？」

「お前が幸運だっさらしきかんざして言っさらしきかんざしたんだろ？」

「右に同じく」

「大体貴方たちISについて何も知らないくせに、よくここに入れましたわね？唯一男性でISを操縦できる方たちと聞いて少しくらい知性を感じさせるかと思っさらしきかんざしていましたけれど、期待はずれですね」

・・・オイオイセシリアさんよ。誰が好き好んであさらしきかんざしなたの期待に応えるっさらしきかんざしてんだよ。そんなことするくらいならほかのやつの期待に応えとるわ

「俺たちに何か期待されても困る」

「・・・ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、貴方たちのような人間にも優しくしてあげますわよ？」

「ほうコレが優しさ・・・ねえ」

「だよなあ」

本当話せば話すほどにイライラするなこのセシリア。・・・ある意味こいつにフラグをたてた一夏を尊敬するよ。

「IS・で分からないことがあれば・・・まあ泣いて頼まれれば教えてあげてもよろしくてよ？なにせ、わたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？入試ってあれか湊。あのIS動かして戦う奴？」

「おう。それだよ。」

「俺も倒したぞ教官」

「まあ俺もだな。・・・大体倒さないといけないと思っていたし。」

「・・・わたくしだけと聞きましたか？」

あらあら。もの凄く動揺しちゃて・・・いい気味だ。えっ？タチ悪い？・・・気にすんなもとからだ。

「女子だけっていうオチだろ」

「つ、つまりわたくしだけではないと？」

「い、いや知らないけど」

「あ、貴方たちも倒したって言うんですかっ!？」

「お、落ち着けよな？」

「これが落ち着いて『キーンコーンカーンコーン』」

あつ残念タイムリミットだな。セシリアも物凄い形相でこっち見てるし。・・・一夏なんて『やっと終わった』っていうような顔してるんだぜ？

「ッ!？またあとで来ますわ!!逃げないことね!良くって!？」

「二度と来んな。」

こうしてセシリアとの初の会合は終わった。・・・しかしこのあとのクラス代表決定戦でセシリアにフラグが俺の方に立たないようにしないとな。じゃないと面白くないし。・・・このあとが見ものだな。

第4話宣戦布告（前書き）

今までのと比べていまいちな気がする。

第4話宣戦布告

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特徴を説明する。
・ああ、その前に、再来週のクラス対抗戦の代表者を決めておかないといけないな」

次の授業はその言葉を始めに開始された。・・・恐らく俺も他薦されるんだろ？なめんどくさい。どうにかして一夏に押し付けるか

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあクラス長だな。因みにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を図るためのものだ。現時点で大したさはないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更できないのでそのつもりで」

・・・改めて聞くとめんどくさそうな役柄だなあ。自分の時間が減るじゃないか。・・・つと女子が話し合い始めた。一夏か俺・・・まあ興味本位か何かで他薦使用としているんだろ

「はいっ織斑一夏君を推薦しますッ！！」

「私もッ」

「じゃあ私は神楽君を推薦しまーす」

「あつ私も神楽君を推薦します」

「・・・えっ俺っ!?!」

一夏は漸く自分が推薦されたことに気づいた。遅いなあ。だから鈍感王なんて言われるんだよ・・・ってか予想していたことが的中してきたな。そろそろセシリアのあの発言がでるかな？

「では候補者は織斑、神楽・・・他にはいないな？」

「ちよつ俺はやりませ『諦めろ一夏』湊？」

「どうせその申請は却下されるんだ。諦めろ」

「笑いながら言うのは止めてくれませんかねえ！？・・・ってかお前は良いのかよ？」

「・・・どのみち聞き入れてもらえないんだ。諦めたよ」

そう返すと、一夏は何か納得したような顔をしてうなずいた。『パアン』・・・そして、織斑先生による一撃が一夏の脳天に炸裂した。実の弟にも容赦ないな・・・ブラコンなのに

『パカンッ』

「うごおおおお・・・頭蓋骨が凹むっ」

「お前が余計なことを考えなければよかったただけだ。」

「なんと非情な」

「・・・もう一発行くか？」

「申し訳ございませんでした。」

えっ？プライド？そんなのこの人の前でもつだけ格好の餌食にしかならないから捨てたよ。

「ちょっと待ってくださいッ！！納得がいきませんわッ」

バンツと机をたたく音がした。・・・意外にうるさい。よしいこと考えた。

「そのような選出認められませんかッ！！大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわッわたくしに、このセシリア・オルコットに一年間そのような屈辱を味わえというのですか！？」

「ゆっくり味わえよ」

「なっ！？・・・実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいというだけの理由で極東の猿に任されてもらっては困ります！！わたくしはこのような島国にまで来てIS修練をしにきたのであつて、サーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

実際に聞くとほんとイライラするなこのセリフ。クラスの殆どが日本人だけに、今のセシリアのセリフに少なからず苛立ちを覚えているものもいるようでクラスの雰囲気が悪くなってきた。

「——大体文化的にも後進的な国で暮らさなければいけないこと自体わたくしにとって、耐え難い苦痛で——」

わりい。ここまでだ。ホンキでキレそう・・・ってかもう我慢する必要がなくね？ここまで耐えた俺頑張った。

「その後進的な国の人間が開発した物を我が物顔で使っているお前は何なんだよ」

「イギリスだつて大したお国自慢無いじゃないか。世界一まずい料理何年覇者だよ」

「なっ！？貴方たちわたくしの祖国を侮辱していますの！？」

「先にしてきたのはそっちだろうに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3764ba/>

I S—転生者の軌跡—

2012年1月12日20時58分発行